

書を捨てよ町へ出よう

—— 映画文学人生論

原作：寺山修司 (1967) 「芳賀書店」

監督：寺山修司 (1971)

出演：私 佐々木孝明

父 齋藤正治

妹 小林由起子

友を求む中年男

脚本：寺山修司

撮影：鋤田正義ほか

音楽：下田逸郎ほか

地獄のマヤ：三輪明宏

夢

少しでも金があつたら、賭博してみよう

映画『書を捨てよ町へ出よう』は映画館の暗闇ではじまる。しばらくして、暗闇のなかから寺山修司が自らあらわれ、「何してんだよ」と、観客を挑発する。「映画館の暗闇の中に坐って、腰かけて、待っていても何もはじまらないよ」。

それでも、観客はおとなく待っている。そのうち、寺山に似た若者が登場する。彼はボクシングをしたり、万引常習犯のおばあちゃんを引取りに交番へ行ったり、輪姦された妹を慰めてレストランで食事をしたり、先輩に案内されて娼婦の部屋に迷い込んだり、通行人と口喧嘩したり、元軍人で無職の父親に屋台で働かせようとしたり、いろいろ無意味な行動を繰り返す。そのあげく、屋台を盗んだ容疑で刑事に手錠をかけられて、「バカヤロー」と何度も絶叫して終わる。

まったくわけのわからない映画だ。まあ、今から四十年前、一九七〇年頃の若者の気分が伝わってくるとはいえる。寺山修司は俳人・歌人・詩人としてアンングラ演劇ブームをまき起こし、テレビでは競馬の予想屋として活躍した。

私もまだ若かったが、二十代におさらばして、そろそろ中年という時期。寺山修司の原作も読まず、映画も観ていないが、『書を捨てよ町へ出よう』というタイトルだけは記憶に残っている。それは、たまたま私が年齢的にも書を捨てようという気分の時期にさしかかっていたからだろう。

書を捨てよ町へ 出よう

映画文学人生論



書を捨ててどうする。町へ出てどこへ行く。私は新宿で京王線に乗り換えて、府中競馬場によく通った。「少しでも金があったら、賭博してみよう」という寺山のすすめに乗ったようなものだ。彼の競馬エッセイは愛読した。特に記憶に残っているのは「さらばミオソチス」だ。ミオソチスはワスレナグサという花の名前。桜花賞やオークスでは勝てなかったが、昭和三十八年秋のオールカマーを制した牝馬である。

六歳になると、地方競馬に売られてしまった。そのミオソチスに寺山修司はわざわざ逢いに行つたという。往年の流行歌手が地方のキャバレーで唄うのを聴きにゆくようなものだ。この牝馬は映画『男はつらいよ』で寅さんのマドンナになるリリー（浅丘ルリ子）を連想させる。私は映画『書を捨てよ町へ出よう』にもミオソチスが登場するのを期待していたが、その期待はずれた。

タイトルも誤解していたようだ。くだらない小説の読書なんかやめ、町へ出て行動しなさいという意味だと思っていたが、そうではない。ジイドの紀行的詩文集『地の糧』の言葉だという。

映画では「町は開かれた場である。書くべき余白は無限」という落書がスクリーンの壁に大書されていた。結局、寺山修司は四十八歳で死ぬまで書を捨てなかつたらしい。

書を捨てよさらば故郷勿忘草